



2010年10月第8巻第9号

かく語りきー聖人の言葉

「宗教の鍵は理論ではなくて実践にある。良き人となり善を為すーこれが宗教のすべてである」

(スワミー・ヴィヴェーカーナンダ)

「喜びの歌を歌い主に捧げ、主の御名に仕え、主の召使いたちの召使いになりなさい」

(グル・ナナク)

今月の目次

- ・かく語りきー聖人の言葉
- ・今月の予定
- ・8月の逗子例会 シュリー・ラーマクリシュナの聖なる一触れ
スワミー・メダサーナンダによる講話 完結編
- ・9月の逗子例会ークリシュナ生誕祝賀会
ゲスト・スピーカー ISKON 東京 寺院長マドゥ・マンガラ・ダース師
・忘れられない物語

- ・ナマステ・インディア
- ・フィリピン・ヴェーダーンタ・ソサエティ マニラ国際ブックフェア2010に参加して
- ・日本ヴェーダーンタ協会創立50周年祝賀会閉会式記念講演 2010年5月30日 山口泰司教授
- ・今月の思想

今月の予定

シュリー・ドゥルガ・プージャ
10月16日(土) 午前11時 東京大田区・太田文化の森

- ・生誕日
スワミー・アベダーナンダ 10月2日(土)
- スワミー・アカンダーナンダ 10月7日(木)

今後の予定

東京例会

11月6日(土) 14:00~16:00
テーマ: バガヴァッド・ギーター
(無料)

インド大使館 (03)3262-2391～97
協会発行の『シュリーマッド・バガヴァッド・ギーター』をお持ちの方はご持参下さい。

返子例会

11月21日(日) 11:00～16:30 講話
のテーマ：マントラ(真言)
皆様のご参加をお待ちしています。

11月13日(土)より隔月で京都にて「バガヴァッド・ギーターとウパニシャッドを学ぶ」ための講座を開催します。詳細は本号最終ページをご覧ください。

8月の返子例会

シュリー・ラーマクリシュナの
聖なる一触れ
スワミー・メダサーナンダ
による講話 完結編

メッセージ隠れた意味

今度は、信者がシュリー・ラーマクリシュナに触れた全く違う例をお話ししましょう。ラカール・チャンドラ・ゴシュ(後のスワミー・ブラマーナンダ)がシュリー・ラーマクリシュナのもとを訪れるようになって間もない頃のことです。ラカールは大変裕福な家の息子で、家では召使いに身の回りのことをやらせていましたが、シュリー・ラーマクリシュナに足をさすっ



てくれと言われました。ラカールは、それは召使いのする仕事だと言って断り、自分は師が神について話すのを聞きに来たのであって、召使いの仕事をやりに来たのではないと不満げに言いました。が、師が何度も頼むので、彼は仕方なく師の足をさすり始めました。するとその途端、ラカールの前にカーリ母神が現れました。母神は師の周りをぐるぐると歩くと師の体の中に溶け入って行ったのです。ラカールは驚きのあまり言葉も出ませんでした。するとシュリー・ラーマクリシュナが彼をからかうようにこう言われました。「ラカール、これで聖人の足をさするとどんなことが起こるのか分かっただろう？」

『シュリー・ラーマクリシュナの福

音』には師が誰かに足をさするよう頼む場面がよく出てきます。足をさすることには何か意味があるのだろうかと思うかもしれませんが。表面的な理由としては、師が単にお疲れになったからなのですが、その裏には、その信者に恩寵を与えたい、靈的な目覚めを授けたいという師の願いがあるのです。スワミー・アドブターナンダジ（元の名はラトゥ）は学校に通ったことがなく字が読めませんでした。スワミーは召使いの仕事をしていましたが、聖職者になりたいと思っていました。何年か師に仕えていましたが、その仕事の一つは師の頼みで足をさすることでした。ある時スワミーが師の足をさしていると、師がこうお尋ねになりました。「ラトゥ、お前のラーマ（ラトゥのイシュタ〈個々人が礼拝する神〉）が今何をしているか分かるか」神であるラーマが今何をしているかなんてどうやって分かるのかと思いつつ、ラトゥは答えました。「いえ、分かりません」すると師は言いました。「お前のラーマは、今針の穴にラクダを通しておられるぞ」後にスワミーはこの言葉の意味を次のように説明しました。「私の靈的レベルはそのとき非常に低かったのだが、シュリー・ラーマクリシュナは私にお触れになることで靈的な力をたくさん私に伝えて下さったのです」このことを師は、不可能な業を為しているという意味で「針の穴にラクダを通す」と表現されていたのです。

レスリングの対戦

スワミー・ヴィジュニヤーナーナンダは、出家する前は建築士や技師として仕事をしており、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの発案と指示によりベルル・マートに建てるラーマクリシュナ寺院を設計しました。スワミー・ヴィジュニヤーナーナンダは、若い頃ダクシネシュワルに何度かやって来ました。ある時ハリ・プラサンナ・チャタージ（スワミー・ヴィジュニヤーナーナンダ）が、他の信者や訪問客と共にシュリー・ラーマクリシュナと話をしていると、いつの間にか皆がいなくなって自分と師が二人だけになっていました。突然師はお尋ねになりました。「レスリングを知っているか」ハリは聖人からこんな思いがけない質問をされてびっくりしましたが、実際にレスリングを少しやったことがあったので、はい、と答えました。「よし、じゃあ、ちょっとやってみよう」ラーマクリシュナはこのとき衰弱して弱った状態で、一方のスワミーは若い盛りでしたが、師が言い張るのなら仕方ないとスワミーは師の挑戦を受けて立つことにしました。スワミーが両手で師を壁に追いやると師はスワミーの肩にぐっと手を押しつけました。その途端、スワミーの体から力が抜けていき、同時に大きな喜びの気持ちが全身に広がり圧倒されました。シュ

リー・ラーマクリシュナは「ほら、私の負けだ。お前の勝ちだよ」とおっしゃいました。後になって、スワミー・ヴィジュニャーナナンダジはこの出来事を回想し、自分は結局シュリー・ラーマクリシュナを師として受け入れたのであるから、本当に勝ったのは自分ではなく師だったと言いました。

この場合も、周りから見たらふざけてレスリングをやっているだけのようですが、実際にはシュリー・ラーマクリシュナには恩寵を授けるつもりがあったのです。このように、師のような神の化身の考えや行為は本当に理解するのが大変難しいのです。師自らが説明する、あるいは知性ある信者が自分で気付く場合を除いて、普通の人には師の行為を理解するのはほぼ不可能と言えるでしょう。スワミー・ヴィジュニャーナナンダジが説明しなかったら、師がお触れになる深い意味を周囲の人が理解することはできないでしょう。

スワミー・サラダーナンダジは、ラーマクリシュナ・マートとラーマクリシュナ・ミッションの初代書記長で、後に『シュリー・ラーマクリシュナの生涯』を執筆されましたが、僧院の設立当初は大きな責務を背負っていました。スワミーがまだ僧になる前、ある時シュリー・ラーマクリシュナは年若いシャラト（スワミー・サラダー

ナンダ）の膝の上に突然乗ったことがあります。実はこれは、この青年が将来僧となってどれだけの重みを背負うことができるか試していたのです。あるいは、スワミーの強さを試してただけでなく、将来の重責に備えて力を伝えていたのかもしれませんが。

ある時、宗教上のお祭りの際にシュリー・ラーマクリシュナはある信者の家を訪ねました。家では霊的な議論が繰り広げられ、信者らは神や神の恩寵などについて語り合っていました。その中に、聖典の学者でありながら無神論者であると宣言する者がいました。師はその学者に突然お触れになりました。そして、勉強したのにどうして神を信じないのかとお尋ねになりました。学者は師に掴まれた途端、前言を撤回して本当は自分は神を信じているのだと言い始めました。ここでも、師の一触れで無神論者が神を信じるようになったのです。師はよく、エゴ（自我）の大きいために神から遠ざかっている人がたくさんいる、神への信仰を打ち立てるのにエゴが最大の障害である、と仰っていました。当時、エゴに邪魔されている人にシュリー・ラーマクリシュナがお触れになると、エゴは途端に小さく縮んで彼らは神を信じるようになったのです。『シュリー・ラーマクリシュナの福音』の中で師が人に触れることが多いのは、こういう理由もあるのです。

考えただけで伝える

先ほど、シュリー・ラーマクリシュナが触れただけで相手に霊的体験をさせる例をいくつかお話ししました。さらに、カーリパーダの場合は、酒好きな性質が変わってしまいました。このように性質が変わってしまう例には、ヨギン・マーに関係する話もあります。ヨギン・マーはシュリー・ラーマクリシュナへの信仰心が非常に厚く、後にホーリー・マザーの所に住んでマザーにお仕えしました。ヨギン・マーがまだ自分の家にいた頃、師は彼女の家をたびたび訪れましたが、彼女の兄弟はなぜか師の訪問を快く思っていないでした。家の近くにマンマータという名のごろつきが住んでいました。この男は近所にいざこざがあった時に解決する、言わば用心棒のような仕事をしており、ヨギンの兄弟ヒラルルはこの男を雇ってシュリー・ラーマクリシュナを脅させました。ところが、師の言葉を少し聞いた途端、マンマータは師の足下にひれ伏して許しと救いを乞い始めました。師はダクシネシュワルに来るように言い、マンマータは友人（後のスワミー・アカンダーナンダジ）に連れられて師のところにやって来ました。マンマータが友人に紹介されて師の前に立つと、師は指で彼の筋肉に触れて強そうだねとおっしゃいました。この一触れで師はマンマータに恩寵を

授け、彼はそれから大変高德な人になったのです。

シュリー・ラーマクリシュナはまた、思っただけで、あるいは相手の前にいるだけで、霊的な力を伝えることもできました。ある日、若い信者のターラク（後のスワミー・シヴァーナンダジ）がパンチャヴァティの森で深く瞑想に浸っていました。この森はダクシネシュワルのカーリ寺院にあり、師が霊的修養を積んだ場所です。師はターラクのそばに行き、立ったまま彼を見ていました。ターラクはそこに師がいて自分を見ていることに気付いていませんでしたが、後に語ったところによると、彼はその時自分の奥深くに巨大な霊的パワーが湧き起こり「クन्दリニ（潜在的な霊的エネルギー）」が目覚めるのを感じていました。シヴァーナンダジは、師がただ思っただけで人の「クन्दリニ」を目覚めさせることができるのだと言っていました。

ヴィヴェーカーナンダの兄弟のマヘンドラナート・ダッタは、『Sri Ramakrishner Anudhyan (Sacred Memories of Sri Ramakrishna)』という素晴らしい著書の中で、シュリー・ラーマクリシュナはサマーディの境地にある時に、思いのままに霊的な力を周囲に向けて放つことができたと述べています。さらに、神への何らかの信仰を持つ人がこの霊的エネルギーを

ンに入ると、自分が霊的に高まるのを感じることができたそうです。このように、霊性を伝えるのに肉体が触れあうことは必ずしも必要ではなかったのです。

静めの一触れ

シュリー・ラーマクリシュナは、一触れで霊的な流れを止めることもできました。例えば、皆で集まって霊性について語り合ったりキルタン（信仰歌）を歌ったりしていると、クンダリニに過度の霊的刺激を受けて意識を失う人が時折出たものでした。すると師は必要に応じて、信者に触れてクンダリニの上昇を止め、流れを下向きに変えて通常意識に戻しておられました。また、師は相手の胸に軽く触れてから、瞑想に行きなさいと指示することもありました。触れられた信者の瞑想は深く長時間となったので、師は再び彼らに触れて効果を止め彼らが家に帰れるようにしてやりました。師はいつどのようにして誰に霊的目覚めを与えるかを決めていらっしやいました。というのも、信者に十分な準備できていない時にクンダリニを目覚めさせてしまうと、いろいろと問題が起きる可能性があるからです。霊的目覚めを得る前に、人は霊的修行を積んで心も体も浄まっている必要があるのです。

こんな例もあります。シュリー・ラー

マクリシュナの甥のリドイは、悟りを得るために瞑想などの修行を長い間一生懸命に行っていました。師はリドイに、自分にはもう十分に仕えているしそんなに激しく修行する必要はないとおっしゃっていたのですが、リドイは全く聞き入れようとしませんでした。ある時リドイは霊的体験を得て、シュリー・ラーマクリシュナが神の化身で自分は聖なる従者であると叫び始めました。なぜダクシネシュワルなんか引きこもって時間を無駄にしているんだ、二人は世界中を歩いて神の到来を告げ教えを説かなければ、と大声でわめき散らしたのです。師は静かにしてくれと必死に頼まれたのですがリドイは一向に収まりません。師は恥ずかしくなってリドイに触れ、「マーよ、リドイをお静め下さい！」とおっしゃいました。すると途端にリドイはいつもの状態に戻り、泣きながら言いました。「おじさん、何をされるんですか。私はあんなにも霊的に高まっていたのに、おじさんのせいで台無しだ！」師はおっしゃいました。「わんぱく小僧め、私は静かにしてくれと頼んだじゃないか。私は深い霊的体験を何度もしているが、あんな風におめいたりしないぞ。お前はわずかの目覚めを経験しただけで大騒ぎだ。私への奉仕はもう十分だったのに、お前は全然聞かないんだね！」

痛みのある接触

インドには、聖職者の足の塵を取ることで尊敬を表すと共に至福を受けるといふ伝統があります。『シュリー・ラーマクリシュナの福音』などの本から、師やホーリー・マザーは浄い人に触れると何も問題はないが非常に世俗的な考えや行動を取る人に触れると痛みを苦しむことがあったのが分かります。そんな時、師とマザーの反応は違っていました。師は霊的体験を押さえようとはせず、そうした体験を周囲に見せるのにためらいはありませんでした。ですから、触れられて痛いことがあれば、相手が恥ずかしく思うことがあっても構わず痛みを表現していました。一方、シュリー・サーラダー・デヴィはマハーマーヤーの化身でしたから、霊的な恍惚状態にあっても触れられて不快な思いをしても、抑え隠すことができたのです。

ある時、若い頃不道德な人生を送っていた年配の家政婦がカーリ寺院に来て、シュリー・ラーマクリシュナの足に触れたことがありました。師は焼けるような痛みを感じて、ガンガーの水で何度も洗い流さないといけませんでした。また、ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュの宗教的芝居を見に行った際には、芝居の後で数人の女優が師に触れて敬意を表しました。この女優らは不道德な生き方をしていたのですが、師は触れられたことで特にマイナスな

影響を受けることはありませんでした。不純な人に触れられた時、なぜ師の反応にこのような違いが起きるのでしょうか。恐らく女優らの場合は、芝居の中で女神や信者の役を演じたすぐ後で内面的に浄められていたから、また心から師の恵みを受けたいと思っていたから、などが理由でしょう。師も、芝居を見たために触れられることに対し準備ができていたのかもしれませんが。一方、家政婦の場合は、違った状況にあり心の準備が全くできていなかったわけです。こうした解釈はあくまで私たちの憶測に過ぎませんが、イエス・キリストの場合も、不道德な生き方をしていたマグダラのマリアに触れて彼女を変えたという有名な例があります。

今の私たちにどのようなプラスがあるのか

「師の一触れ」はずっと昔の出来事なのに、現代の私たちに一体どのような意義があるのでしょうか。私たちはシュリー・ラーマクリシュナにもホーリー・マザーにもすぐに会うことはできないのに、このような話が私たちとどのような関係があるのでしょうか。皆さんの多くは、自宅に師やマザーの写真、ブッダの絵や像を置いていると思います。マザーは、私たちが絵や像、写真を神だと考えて篤く信仰し、深く礼拝や瞑想を行えば、その絵や像、写真に神が特別に姿を現されるとおっし

やいました。それは単なる紙切れや粘土、木ではなくなり、神がそこに住まわれるのです。ダクシネシュワルにあるカーリ母神の像は石でできていましたが、シュリー・ラーマクリシュナが強く信じ、愛し、礼拝したためにカーリ母神が本当にその像の中に姿を現したのです。私たちの信仰が十分な強さに達した時、師は私たちが持つ写真の中に住まわれるのです。その時信仰心を持ってその写真に触れば、何かしらの恩恵を授かることでしょう。

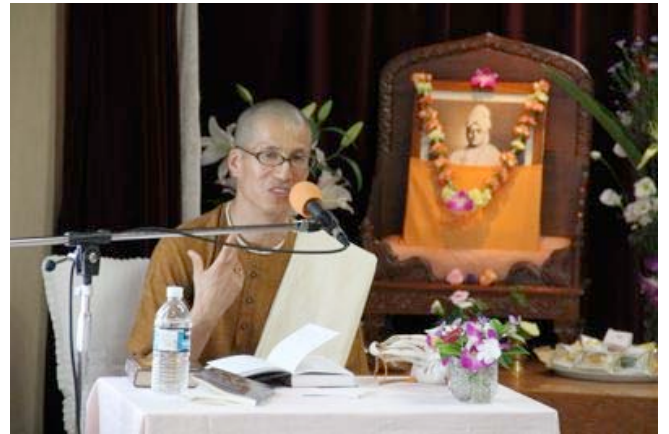
インドには神々の像がたくさんあり、ドゥルガ母神やカーリ母神などの女神や神に捧げる祭りがいろいろあります。これらの祭りでは最後に神の像が川に浸されるのですが、その前に信者らは敬愛と信仰の気持ちから像の足に触れます。信者らにとって像は粘土や石ではなく、神の現れなのです。こうして触れることで、恩寵をいただく、浄められる等の霊的恩恵を受けたいと願っているのです。このように、現代に生きる私たちも聖なる一触れから恩恵に与ることができるのです。

9月の逗子例会

シュリー・クリシュナ生誕祝賀会

クリシュナの生誕日はあるインドの暦で2010年9月1日に当たるため、日本ヴェーダーンタ協会では9月の第3

日曜日に開催された逗子例会でクリシュナ生誕祝賀会を行いました。祝賀会にはISKON 東京の寺院長マドゥ・マンガラ・ダース師をお招きしてシュリー・クリシュナをテーマに講話を行っていただきました。



午前11時にヴェーダのマントラで祝賀会は始まり、バガヴァッド・ギーターの一節を輪読しました。そして、ゲストであるダース氏がキルタンを歌われ、お話をされました。以下が講話の要約です。

「クリシュナ降誕祭に講話をする機会をいただき感謝しています。私はマドゥ・マンガラ・ダースといいます。長いので、マドゥと覚えて下さい。1992年にこの名前をいただき、入門しました。この名は、クリシュナの友人の名です。よく冗談を言うおもしろい友で、実は私が以前芸人をやっていたことからこの名をいただきました。

さきほど皆でギーター第12章を唱えましたが、この章でクリシュナは、どんな段階からでもバクティを実践す

ることができるのを説いています。クリシュナは非常に親切で寛大ですね。初めは一番高いところから、すなわち常に私を思い私に知性を固定しなさいと要求します。しかしこれは大変難しいことです。次に、それができないのであればできるようになるために、修行をしなさいと言います。これはサーダナーバクティと言います。これは望みを変えるための修行で、きっかけはどんな望みでもいいから、次第により高いレベルの望みを持つようにするものです。さらに、それができない人には、私のために働きなさいと説く。それもいやだ、自分のために働きたいと言うのなら、それもいい、ならばいいことのために働きなさい。それさえもいやだ、自分の稼ぎは全部自分で使いたいというような人は、知識だけでも少し勉強してみてくださいと言うのです。



シュリーマッド・バーガヴァタムという教典があります。ギターを高校としたらこれは大学にたとえることができます。18,000 節、全 12 巻の聖典で、いろんなタイプ・段階のディボーティ（信者）がどうやってクリシュナ

にバクティを捧げ完成していったかという例がたくさん出ています。例として、ドゥルヴァ・マハラージの話をお話ししましょう。彼は王様の第一王妃の息子でしたがある理由から母親は女中へと格下げされてしまい、第二王妃が第一王妃となります。彼が 5 歳のある日、第一王妃の侮辱的な言葉に深く傷ついて激怒し、復讐の思いから霊的修行を始めました。ドゥルヴァは苦行の末ついに悟りを開き、その苦行に満足したヴィシュヌは彼の望みを叶えるために、彼の前に姿を現しました。怒りと復讐心から修行を始めたにもかかわらず、神は彼の努力に応えてくれたのです。しかしドゥルヴァは、美しいヴィシュヌの姿を目にすると、自分が求めていたものは何の価値もないものだったと気づいて後悔し、「永遠にあなたの蓮華の御足を瞑想し仕えることだけが私の願いです」と言いました。しかしヴィシュヌは、「だめだ、お前は、父親より大きな王国を手に入れて見返してやりたいと願って修行を始めたのだ。私はそれをかなえなければならない」と言って聞きません。そこでドゥルヴァは仕方なくヴィシュヌの言葉を聞き入れて、自分の王国として一つの惑星をもらいました。それが現在の北極星です。

このドゥルヴァの話には霊性に関する大切な話がいっぱいあります。でも、私が今日一番伝えたいことは、自分と

自分のグルに正直になるということです。ドゥルヴァは、修行のため森に向かう途中でナーラダムニに出会いました。ナーラダは彼に次のような素晴らしい教えを授けました。「修行において自分より優れた人に会ったら心から喜びなさい。同じぐらいのレベルの人には友好的に接しなさい。自分よりまだ低い所にいる人に出会ったら、思いやりを持って助けてあげなさい。すべての人に心から敬意を払って生きるなら、一生を終えたとき必ず解脱することができる」しかしドゥルヴァはそれを受け入れませんでした。あなたの教えはごもつともだが、私にはできない、それはサットワ・グナを身につけた人が実践できることであり、クシャトリヤの自分のハートには響かない、と正直に打ち明けました。そこでナーラダはドゥルヴァに合った方法を伝え、ドゥルヴァはそれを実践してわずか半年後に悟りを得るのです。

ここで分かるように、今自分がどこにいてどんな状態なのかを知り、それを正直にグルに伝えて自分が実践できる修行法を求めることは、グルと弟子の関係において大変重要なことです。そうすればグルは、自分に最も合う方法を教えてくれるのです。例えば、道に迷った時、誰かに電話して道を教えてもらおうとしても、今自分がどこにいるか分からなければ、相手には助けようがありません。バーガヴァタムの

第1巻には物質宇宙の研究が書いてあります。霊的な百科事典と言われているものになぜ物質宇宙のことが書いてあるかという、自分のいる場所、スタート地点について知るためなのです」

忘れられない物語

師の最後の教え

師の死期が迫っていることを知り、弟子らは師のために立派な葬式を出したいと願っていた。しかし、師はそのことを聞くとこう言った。「天と地が私の棺となり、太陽や月や星々が私の礼服となる。そして神の創造物すべてが墓まで私に付き従ってくれる。これ以上厳かで豪華なことがあるだろうか」

師は土に埋めないで欲しいと頼んだが、弟子らは聞き入れようとせず、そんなことをしたら動物や鳥に食べられてしまいますと抗議した。

「では、私の付き人を私のそばに置いてくれ。そうしたら動物たちを追い払えるから」と、師は微笑んで言った。

「でも、どうやって指示を出されるのですか。もう意識がなくなっていっしょなのに」

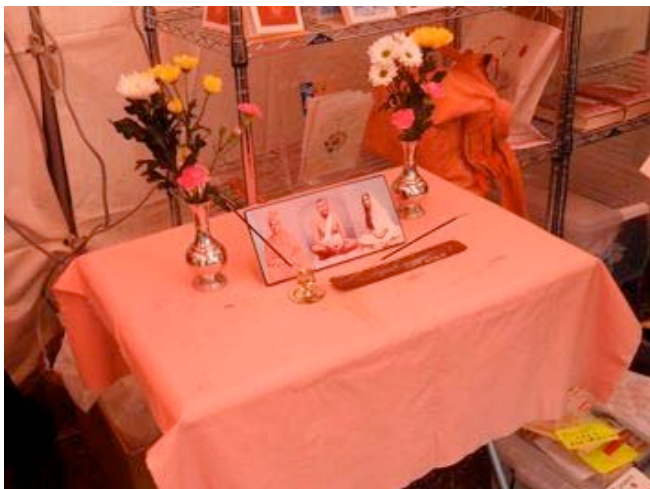
「意識がないのなら、私が鳥や獣に

食べられても問題はないと思うんだがね」

(Anthony de Mello 著
『Short Wisdom Stories』)

ナマステ・インドア 2010

日本ヴェーダーンタ協会は、9月25日(土)～26日(日)に東京・代々木公園で開催された「ナマステ・インドア 2010」に参加しました。ナマステ・インドアは毎年数万人の人が訪れるイベントで、協会が参加するのは今年で4年目になります。



店内の祭壇

イベント当日までの数日間、逗子の協会では出店に必要な品々が準備されました。本、お香、写真、瞑想マット、エコバッグなどの販売品の他、ディスプレイ用の棚なども用意され、イベント前日の夜、レンタルしたバンに積み込まれました。25日(土)の早朝、スワミー・メダサーナンダと数人のボランティアの方々が逗子を出発して代々木公園へと向かいました。会場に

着くとすでに多くのボランティアが待機していました。



イベント会場側のスタッフが、前日の晩と当日早朝、嵐の中を各ブースに天幕を張り電源用のケーブルを準備して下さいました。土曜日は少なくとも午前中いっぱい嵐の影響で雨にやられるのではないかと懸念されましたが、心配している時間はありません。とにかく皆でディスプレイ用の棚を組み立てて設置し、販売する品々を棚やテーブルの上に並べていきました。



午前10時までにブースの準備がほぼ完了し、シュリー・ラーマクリシュナとホーリー・マザー、スワミー・ヴィヴェーカーナンダのお写真を並べ

た小さな祭壇も設置されました。会場にどっと人がなだれ込んできました。幸いなことに、この後すぐに天気は回復して日が照り始め、出店者らもお客様たちも喜んでいました。

土曜日も翌日の日曜日も、会場には人の波が始終絶えず、協会のお店にも多くのお客様が入りました。お買い上げいただいた皆様に協会の活動について記したパンフレットと協会で販売している商品のカタログを差し上げました。



お店ではボランティアの方々が交代で販売の手伝いをして下さいました。休憩時には会場内のインド料理ブースに行って都内のインド・レストランが提供しているおいしい料理を楽しまれました。また、野外シアターではフェスティバル開催時間中、絶えず文化プログラムが行われていました。インドの音楽や伝統舞踊の他、現代的な「ボリウッド (Bollywood)」風のダンスも披露されていきました。シアターの周りには多くの人々がパフォーマン

スを一見しようと集まっており、中には見る席を確保できずに仕方なくシアターの裏側に回っていた人たちもいました。

26日(日)の夕方になると再び雨が降り出しましたが、イベントは大成功を収め夜8時頃幕を閉じました。ボランティアの方々が残った品々を箱に詰め、分解した棚と一緒にバンに詰め込みました。雨の中の作業でしたが、その場は幸せで満ち足りた雰囲気に包まれていました。撤収作業の後、スワミー・メダサーナンダとその場にいたボランティア全員で集合写真を撮りました。そして、ヴェーダの「プールナマダ、プールナミダム」を皆で唱えました。

(Enrico Colombo 氏寄稿)

フィリピン・ヴェーダーンタ・ソサエティ

マニラ国際ブックフェア2010に参加して

9月15日～19日、マニラ湾に面したSMXという大規模な展示場で、マニラ国際ブックフェアが開催され、フィリピン・ラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ・ソサエティが出展しました。ヴェーダーンタ・ソサエティの出展は今年で4年目になります。

毎年このブックフェアには数万人が来場し、来場者の中には学生の団体も数多く見られます。展示場にはあらゆる種類の書籍が並べられます。宗教や哲学に関する本も数多くあり、様々な宗派のキリスト教団体や仏教団体なども出展します。フィリピン・ラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ・ソサエティでは、140種類の書籍を合計645冊出品しました。

フィリピンでは英語がよく使われるため、フェアに展示される本の大部分は英語ですが、タガログ語の本もかなりありました。ヴェーダーンタ・ソサエティが出品した本はほとんどがインドから輸入した英語版ですが、タガログ語の本も1冊出しました。これは、『A Short Life of Sri Sarada Devi, the Holy Mother』のタガログ語版（日本語版は『霊性の師たちの生涯』の中に収められています）で、Flordeliza S. Flancia 教授が翻訳されたものです。

フィリピン・ラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ・ソサエティにとって、フェアは本の販売で利益を得ることよりも、フィリピンの一般市民に対してソサエティの知名度を上げるための場です。今回は約150冊の本が売れ、たくさんの方々にソサエティのマニラ・センターの存在を知ってもらうことができました。また、ソサエティを訪問しいろいろな活動に参加するよう声も

かけました。私たちの本に興味を示した方々にはソサエティについて記したチラシを配ると共に、ソサエティの連絡先の入ったしおりとお香数本をプレゼントしました。

(Enrico Colombo 氏寄稿)

日本ヴェーダーンタ協会創立 50周年祝賀会閉会式記念講演 2010年5月30日

山口泰司教授



まず始めに、本日、「日本ヴェーダーンタ協会」創立50周年祝賀会の場に、一言ご挨拶申し上げるようお招きいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

私は西洋哲学を専攻して、広く哲学的人間学の立場から、人間の本質を能うかぎり多様な視角に立ってトータルに理解したいと、若いころより悪戦苦闘してまいりましたが、これと言った成果もあげられずに、ひとり我をあわれんで参りました。

そのような者が、いつしかインド哲学に惹かれるようになって、とうとう昨年は、近代インド思想の金字塔とも

唱われる、シュリー・オーロビンドの主著『The Life Devine、神の生命——靈的進化の哲学』の翻訳を出版するまでになってしまいました。本日お招きにあずかりました理由も、おそらくはそこにあるものと思われます。

そこでまず、私が西洋哲学を専攻しながらも何故インド思想に引かれるようになったのか、そのわけを少しくお話してみたいと存じます。

ご存知の通り、西洋では科学に代表されるように、学問は分析的理性と感覚による確証とを真理の最高法廷と考えます。つまり頭でも考えられず体でも確かめられないようなものは、存在しないも同然と考えるわけです。ところが哲学は、本来、一体この自分は何ものなのか、はたして自分はどこから来てどこに行こうとしているのか、またこの世を超えたところには何が広がっているのか、意識をかぎりなく深く掘り下げていったらどこに行き着き、意識をかぎりなく高く昇っていったらどこに到るのか、といった謎めいた問いに、真正面から取り組むはずの学問です。そのようななかで人間をトータルに捉えようとするれば、どうしても無理が生ずるのは当然です。人間を理性と感覚の枠のなかに閉じこめて、その範囲のなかで決着をつけようとするれば、とかく、胸の憶いとか、魂のねがいつか、生命の輝きとか、幽玄な情趣といったものは、ことごとく切り捨てられるしかないからです。それでもめげず

に、私は、実存哲学や精神病理学をはじめ、芸術学はもとより、動物行動学や進化生物学などにまで手を出して、人間の全貌を学問として捉えようとしたのですが、「魂の世話」というソクラテスのキャッチフレーズには一步も近づけないという無力感は、どうすることもできませんでした。

しかし私のこの無力感は、17世紀以来西洋の近代哲学そのものが抱きつづけてきた無力感だと言ってもいいのです。17世紀18世紀の哲学は理性を人間の最高の能力と考えて、理想主義の立場から人間を限りなく高邁なものとして捉えようとしたのですが、19世紀の産業社会になると、ひ弱な理想主義に代わって、新たに物質的現実立脚した感覚的世界が真理の法廷とされて、いっそう力強い現実主義の人間観が押し出されるようになっていきます。ところが19世紀も半ばを過ぎて近代社会の矛盾が様々なかたちで顕かになりはじめると、人々は大きな社会不安のなかで、人間が無意識のうちにかかえている、ただの理性でもただの感性でも解決することができないような根本不安に次第に深く目覚めるようになっていきます。やがて、頭よりもからだよりももっと深いところに人間を解く鍵が潜んでいるのではないのかという思いが、実存哲学となって結実し、意識よりもっと深い無意識にこそ問題解決の糸口は隠されているのではないのかという思いが、精神病理学などを誕

生させ、20世紀になると、ほとんどすべての人文科学は、それぞれの分野で無意識的世界の構造を探ろうと一斉に走り出したと言ってもよいほどです。

そのようななかで現代の西洋哲学はせつかく<実存>といった観念や<無意識>といった観念を探り当てながらも、それらが<生命>に、それも宇宙的生命に根を張るものであり、それらが<魂>に、それも神の魂に発するものであることを認めようとしないうちに、理性の無力と感性の頼りなさを徒に嘆くばかりで、ついに人間のかかえる根本問題を解くことができずにいるのです。この無力感をきわめて垢抜けした仕方で華麗に表現したのが、ポストモダンといわれる一群の現代思想です。この思想は「近代の死」を宣言し、ヨーロッパ中心主義、理性中心主義を告発して、人間的視点の無限の多様性と真理の相対性を説く、きわめて真摯な哲学ではあるのですが、無常の法と無我の法は説いても、靈魂の不滅や神の實在はもとより、八正道さえ説くことがないため、ついに希望の哲学となることができないでいるのです。

私がこのようななかで西洋哲学の限界と自分の無力感を克服しようと、若いころより純粹に個人的なレベルで憧れつづけてきたのが、澄み切った水のような境地で静かに道を説かれる釈尊の人格と、虐げられた者たちへの燃えるような憶いで火を噴くような教えを説かれるキリスト・イエスの人格とで

したが、その後たまたま手にした書物から偶然に知ったのが、神に酔える宗教的天才、ラーマクリシュナの蜜のように甘く、朝露のように爽やかな人格でした。こうした偉大な人たちを身近に感じながら、芸術に、それもとりわけ東西の宗教音楽に慰めを見出すというのが、無力感克服のせめてもの私の道でしたが、やはり学問上の無力感はいかんともしがたく、私は、意識の神秘と生命の神秘を科学的進化論の視点から扱ったダニエル・デネットの二つの大著の研究と紹介をすませたあと、いよいよインドのヴェーダーンタ哲学の伝統を踏まえて生命の靈的進化の哲学を説いたシュリー・オーロビンドの大著に取り組むことにしたのです。オーロビンドの『神の生命』は若いころ宮沢賢治研究家の親友と二人で読み始めていたのですが、西洋流の合理思想しか知らない自分からしたら、発想があまりにも奇抜でその独特の言葉遣いもひどく難解に思われたため、ついに棚上げにしてしまっていたのです。ところが私は、これを理解し、これを紹介しないかぎり自分の哲学研究は永遠に中途半端なものに終わってしまうという強迫観念じみた憶いを次第に禁じることができなくなっていたため、西洋哲学と理性からの呪縛のなかですっかり重くなってしまっていた腰を上げてやっと本格的に研究し始めてみると、何故か今度は、読むもの読むものの一文字一句が、自分が書きたいと思うとお

りに書かれ、自分が言いたいと思うとおりに言われていることが分かり、私は学問の歓びを心の底からやっとな味わうことができるようになったのでした。ところで、シュリー・オーロビンドと言っても、日本ではご存知ない方がほとんどではないかと思われまので、ここで少しく彼について紹介させていただきますと、オーロビンドは、1872年に、イギリス帰りの医者の子としてカルカッタに生まれたのですが、父親が大のイギリスびいきで、何としても息子をイギリスによるインド統治の高等文官試験にパスさせたいという思いから、早くも7歳になったばかりのオーロビンドを、二人の兄たちと一緒にイギリスに送りこんでしまうのです。幸いオーロビンドは、持ち前の抜群の探究心と理解力とによって、イギリスでの厳しい試練に耐えて名門セント・ポール校からケンブリッジ大学へと順調に進んで、古典学では首席の成績で大学を終了するのですが、すでに揺るぎないものとなっていたインド独立革命への憶いから、インド統治の高等文官試験だけはあえてボイコットして、帰国後はバローダ藩王国の政務官として働くかたわら、ひそかに革命運動を準備していたのです。しかしながら時到了と見るや、当時の政治運動のメッカ、カルカッタに赴いて、政治・ジャーナリズムの世界で急進派のリーダーとしてたちまちにして頭角をあらわすのですが、その間に起こった要人暗

殺未遂のテロ事件の黒幕と見なされて一年間の投獄を余儀なくされてしまいます。しかし獄中では、帰国後すでに始めていたヴェーダーンタ哲学の研究とバガヴァッド・ギーターの研究など、本格的なインド研究とヨーガの修練を一年間集中して行うことで、普通では考えられないほど高い霊的境地に達して、革命家から宗教家への転身の準備が期せずしてとげられていたため、一年後に無罪放免の身となったときには、今度こそは何としてもインドの英雄に死罪をと待ち構えていたイギリスの官憲の手を逃れるべく、仏領首都ボンダイシェリーに亡命して、そこで哲人宗教家としての道を歩み始めることになるのです。彼は生涯この地にとどまって、ヨーガ、それもとりわけ瞑想の実修体験をベースに、人類の実態と可能性をめぐる一連の膨大な著作活動を続けながら、後進の指導に当たりました。政治への関心は生涯失われることはありませんでしたが、イギリスからのインドの解放というテーマに代わって、無知からの人類の解放と、霊的進化による人類の統一という理想が、新たな目標となったのです。

さて、オーロビンドの思想を紹介する前に、その思想と哲学的生涯を理解するための決定的な鍵となるオーロビンド自身の言葉を二つ、紹介させて下さい。

「・・・ところが監獄には、「ギーター

一」と「ウパニシャッド」を携えていったので、私は「ギター」のヨーガを実修し、「ウパニシャッド」を頼りに瞑想をしたのです。・・・疑問や難しい問題が生ずると、光を求めて、時折「ギター」を開いてみたのですが、そこからは助けや答えが返って来るのが普通でした。・・・監獄では、一人で瞑想をしていると、2週間にわたって、ヴィヴェーカーナンダの声が絶えず私に語りかけていたので、私は嘘偽りなく彼の存在をありありと身近に感じていたのです。・・・その声が語りかけてくるのは、靈的経験の、きわめて重要な限られた特殊な分野でのことでは、そのテーマについて言うべきことを言い終わると、その声はぴたりと止まってしまうのでした。

(「Sri Aurobindo on Himself」より)

1912年12月5日の日記(「Record of Yoga」より)

・・・10月18日に・・・シュリー・ラーマクリシュナより3回目の、そして最後のメッセージが届いた。最初のメッセージはバローダで届いたもので、「オーロビンドよ、寺院を建てなさい、寺院を建てなさい」というものと、蛇のプラヴリッティ the snake Pravritti が自分をむさぼり食らっている寓話とであった。次のメッセージが与えられたのは、ポンディシェリーに到着してすぐ、シャンケル・チェティ Shanker Chetti の家でのことであったが、その

ときの言葉は失われてしまったが、より低い自己のうちにより高い「自己」を形成せよといった内容のものであり、それは、サーダナーが終りに近づいた頃、もう一度語りかけるという約束を伴うものであった。そして以下に記すのが、3番目のメッセージである。

(1912年10月18日)

「カルマの完璧なサンニヤーサになりなさい。

思考の完璧なサンニヤーサになりなさい。

憶い(感情)の完璧なサンニヤーサになりなさい。

これが、私の最後のメッセージです」

以上でおわかりのように、何と、シュリー・ラーマクリシュナこそがオーロビンドの影のスーパーヴァイザーであり、ヴィヴェーカーナンダこそがオーロビンドの影のチューターであったのです。

オーロビンドによれば、永遠の存在でもあり、永遠の意識でもあり、永遠の至福でもある絶対者ブラフマンは、その全き自由意志にもとづいて、インヴォリューションという退縮のプロセスを繰り返すことで天地万物を形成し、みずから無限に多様な物質的現実となってこの世にくだるのです。

生命も意識も欠いた、ただの死せる物質的現実と見えるもののうちにも、ブラフマンの永遠の存在と意識と至福

とがそっくり姿なきままに息づいているため、やがて時が到ると、死せる物質のうちから生命が目覚め、盲目的生命のうちから意識が目覚め、おぼろな意識のうちから精神が目覚めてくるのです。インヴォリューションのプロセスによって形成された天地万物が、エヴォリューションという進化のプロセスによって順次より高い世界に目覚めながら、有限で束の間の世界を除々に脱して、もと来た絶対者ブラフマンの世界に近づいていくのだというのです。だとしたら、精神に目覚めた人類が、すでに精神のうちに息づいている超精神 **supermind** や超理性 **superreason** に目覚めて、さらに超人類への脱皮の道を辿り始めないはずはなく、古代インドのリシたちや、天使・菩薩などに象徴されるような、慈悲と智慧の権化と化した存在にまで高まれないはずはないではないか、というのです。

このようなオーロピンドの主張を象徴するのが、「遍在する、聖なるまことの現実」という言葉であり、「インヴォリューションとエヴォリューションの循環」という言葉であり、「神の生命」という言葉であり、「全一的統合」という言葉なのです。

このように、存在する一切がまさに神の生命を宿した聖なる現実だとすれば、私たちのからだやこの世の現実はもとより、いかなる二分法の片割れも、切り捨てられるべきものは一つとしてなく、存在する一切が、本来の聖なる

世界への脱皮をとげようとしている、なくてはならない仲間ではないか、というわけです。しかしこうしたすべての主張も、神の魂こそが我が魂であり、神の生命こそが我らが生命なのだとする、ヴェーダーンタ哲学の本髄に発するものであることは、言うまでもありません。最後に、オーロピンドの 1100 頁にも及ぶ大著『神の生命』も、ある意味では、彼の事実上のチューター、ヴィヴェーカーナンダの、「人間の本性」と題するわずか数頁分のロンドン講演の、綿密無類な注解の書なのだということをお願いの言葉とさせていただきます。

今月の思想

自由な人間とは、自らの思考の果てまで行くことを恐れない人のことである。(レオン・ブルム)

～土曜サット・サンガのご案内～

「バガヴァッド・ギーターとウパニシャッドを学ぶ」

哲学書『ウパニシャッド』はインド思想の源泉です。

ウパニシャッドを知ることなしにヨーガを実修することは、迷い道を歩むようなものです。

今回は、ウパニシャッドの意味、作者である賢者たちなど、基礎的な知識

から、ヴェーダ聖典、ヴェーダーンタ思想についてお話いたします。

そしてさらに深く、至高の存在（ブラーフマン）内なる自己（アートマン）の関係を説いていきます。

また、聖典『バガヴァッド・ギーター』は、ウパニシャッドの精髓といわれ、日常生活を通してヨーガを実践する方法が説かれています。

これらを学び知ることによって、皆さんが幸せになり、瞑想は深まるでしょう。

瞑想で心を調べ、基本的な理論を学び、実践につなげましょう。

易しく、ユーモアにあふれた解説で、講師がお話いたします。是非ご参加ください。

記

【日 時】 2010年11月13日（土）
13:30～17:00

【会 場】 「キャンパスプラザ京都」
5F 第1演習室 Tel: 075-353-9111
京都市下京区西洞院通塩小路下ル
（JR京都駅北側から徒歩3分 中央郵便局西側 ビッグカメラ前）

【講 師】 スワームイー・メダサーナ
ンダ師
（インド、ラーマクリシュナ・ミッシ

ョン日本支部 日本ヴェーダーンタ協会会長）

インド・コルカタ（カルカッタ）生まれ。歴史学修士。

1974年インド最大の僧団ラーマクリシュナ・ミッションで出家僧となる。

ヴェーダーンタ、ヨーガ哲学を研鑽。

1993年日本ヴェーダーンタ協会に赴任。大聖ラーマクリシュナ、スワームイー・ヴィヴェーカーナンダの思想を伝えるために各地で講演。

インド思想のみならず、歴史学者としても活躍。近著に『聖地ベナレスの歴史』がある。

講義はメダサーナダ師が日本語でお話します。

【スケジュール】 13:00：受付開始

第1部 13:30：チャンティングと沈黙の祈り

13:35：聖典『バガヴァッド・ギーター』の概要と解説

14:50：質疑応答と瞑想

15:00：ティータイム

第2部 15:30：チャンティングと沈黙の祈り

15:35：聖典『ウパニシャッド』の概要と解説

16:50：質疑応答と瞑想

17:00：閉会

【定 員】 30名様（定員になり次第、締め切らせていただきます）

【受講料】 2,500 円（どちらか1部のみ受講・・・1,500 円）当日お支払い。テキスト代は含みません。

【お申込み・お問い合わせ】 下記の担当者が、E-mail または FAX でお受けします。氏名・住所・電話・Eメールアドレスをご記入ください（なお、氏名と住所にはフリガナをつけてくださるようお願いいたします）。

【締め切り】 11 月 6 日（土）

【キャンセル】 速やかに下記までお知らせ下さい。

※今後、当講座「バガヴァッド・ギーターとウパニシャッドを学ぶ」は、2か月に1度実施する予定です。日程・場所は追ってお知らせいたします。テキストは、日本ヴェーダーンタ協会『ウパニシャッド』（¥1500+税）と『シュリーマッド・バガヴァッド・ギーター』（¥1400+税）を使用する予定です。必要な方はお申し込み下さい。
以 上

主 催：日本ヴェーダーンタ協会（インド、ラーマクリシュナ・ミッション 日本支部）

担当：前田きく江

E-mail: hau11340@tree.odn.ne.jp

FAX: 0797-77-2178

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp